

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和6年度 新川みどり野高等学校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動（学習指導）
重点課題	生徒の実態に即した適切な受講登録とわかる授業の確立
現 状	<ul style="list-style-type: none">・本校には不登校経験者が多く、基礎学力が定着していない生徒がいる。・様々な理由から、転入学生や編入学生が在籍している。・進路希望は就職希望から四年制大学への進学まで多岐にわたる。・学習への目的意識に乏しく、安易な欠席や遅刻が見受けられる。・コミュニケーションが構築できず、グループ活動や意見交換が苦手である。
達成目標	<ul style="list-style-type: none">・講座出席率と単位修得率の向上・講座出席率80%以上 単位修得率80%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none">・不登校生徒や学習習慣が身に付いていない生徒が授業に参加できるように、学校全体で学習の支援にあたる。・多様な生徒のニーズに応じた、弾力的な教育課程の編成に努める。・ホームルームや面談を通じ、一人一人の目的に沿った無理のない受講登録を勧める。・生徒、教員（担任・授業担当者）、保護者との連携をとっていく。・ICT機器活用の推進を図り、タブレットやデジタルコンテンツ等を活用した教材開発に努める。・指導と評価の一体化を推し進め、校内外の研修を生かして授業改善に努める。
達成度	<ul style="list-style-type: none">・講座出席率 86.3% （昨年度 83.0%）・単位修得率 89.5% （昨年度 85.3%）
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none">・少人数授業や習熟度別授業の中に中学校の振り返りを取り入れながら、生徒一人一人に応じたきめ細やかな指導を行った。・年間指導計画の中で学習のねらいと評価規準を教員と生徒の間で共有し、生徒が主体的に学べるように努めた。・カリキュラムポリシーに基づき、各年次(夜間)や各教科との連携を図りながら、柔軟な教育課程の編成に取り組んだ。・時間割作成の際には生徒一人に複数の教員(年次、教科、教務)が対応し、生徒が無理のない受講登録をするように支援した。・技術支援員による校内研修を行い、タブレット等のICT機器の活用推進に取り組んだ。・互見授業を行ったりデジタル教科書を活用したりすることで授業改善に努め、生徒の学習理解が深まるように努めた。
評 価	A
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none">・今後も、生徒への丁寧な関わりや指導により出席率や単位修得率を上げてほしい。・不登校経験により、基礎的な学力に欠ける生徒が多いと思うが、引き続き授業の中で、それらの生徒に対するフォローを行ってほしい。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none">・互見授業や校内外の研修を活用して、授業改善に努める。・技術支援員による校内研修を通じて、タブレット等のICT機器の活用推進や、授業で使用するメディア技術の習得に努める。・多様な生徒のニーズに対応できる、柔軟な教育課程の編成に努める。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)

令和6年度 新川みどり野高等学校アクションプラン - 2 -	
重点項目	学習活動（福祉教養科）
重点課題	家庭・福祉への興味・関心を向上させ、家庭・福祉に関する知識・技術の習得を図るとともに、福祉教養科での学びの達成感や充実感を高める。
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・地域における生活体験の希薄化により、家庭に関する基礎・基本が定着しにくく、意欲が乏しい生徒が増えている。 ・教育課程において、多様な家庭に関する専門科目（被服、食物、住居、保育、福祉など）、福祉に関する専門科目を設定し、生徒それぞれの興味・関心や進路希望に対応している。 ・家庭・福祉に関する専門科目において、実習・体験や、専門家による講義等を計画的に取り入れ、専門性を高めるように取り組んでいる。 ・里孫活動を含めた家庭クラブ活動を継続的に実施している。 ・3年次生を対象に介護職員初任者研修を実施している。
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・福祉への興味・関心の向上、家庭・福祉に関する知識・技術の習得に向けた指導体制の充実や改善を行う。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・専門科目全般の授業において、体験的な学習や生活産業の専門家を招いた授業の実施など、学習指導の充実を図る。 ・授業以外においても、家庭クラブ活動（里孫活動を含む）や、福祉施設での校外実習、福祉教養科合同ホームルームでの体験的な講座や交流活動の充実を図る。 ・以上の取組を通して、家庭・福祉への興味・関心の向上、家庭・福祉に関する知識・技術の習得、福祉マインドの育成を目指すとともに、生徒自らが家庭や福祉を学ぶ意義について考えさせ、福祉教養科での学びの達成感や充実感を高めさせる。 ・1年次生から介護職員初任者研修の資格取得に向けた働きかけを行う。
達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・指導体制の充実や改善を行うことができた。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・専門科目の授業においては、生活産業の専門家を招いた授業を行うとともに、体験的な学習を充実させ、専門的な知識や技術の習得を目指した指導体制の充実を行った。 ・新型コロナウイルス感染症の影響で、長らく新川ヴィーラ・しんきろうハウスの利用者の方と直接交流できていなかったが、今年度は家庭クラブ活動や福祉教養科合同ホームルームで、生徒が考えたレクリエーション活動を施設で実施し、直接交流することができた。また今年度は、わかくさ作業所に行き、利用者さんとバルーンアートを通して交流するという新たな機会を持つことができた。 ・生徒に「学校生活、家庭・福祉についての自己評価表」を前期・後期に実施した結果、自己評価が前期より後期にかけて向上した生徒の人数は、6人中4人（67%）だった。 ・1年次生から介護職員初任者研修の資格取得に向けた働きかけを行った。
評 価	B
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉施設との交流は地域社会と関わる貴重な機会であり、普通科生徒の参加の検討もほしい。 ・達成目標・達成度について、数値では表せないものとなっている。達成度を評価する際には、恣意的にならないように工夫して行ってほしい。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・福祉への興味・関心の向上、家庭・福祉に関する知識・技術の習得を図るとともに、福祉教養科の学びの達成感や充実感を高めることを目指して、さらに指導・支援を充実させる。 ・新川ヴィーラ、しんきろうハウス、わかくさ作業所の利用者さんとの交流を継続的に実施する。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

重点項目	学校生活（保健指導）
重点課題	保健厚生委員会活動の活性化による、生徒の環境整備に対する意識向上
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・保健厚生委員会では、昨年度から多くの一般企業等で取り組まれている5S活動の導入に取り組んでおり、今年度は意識向上に向けた更なる取り組みが必要である。 ・地域ごとのゴミ分別は、環境保全に不可欠であり、委員会活動としてゴミの分別チェックを継続的に実施してきたが、十分な効果は得られていない。保健厚生委員会による生徒目線の情報発信と実践的な行動から、全校生徒一人一人が5S活動の理解を深め、社会人としての準備を進めていくことが求められている。
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会活動において環境整備に関する啓発活動を月1回以上実施する
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・保健厚生委員会の活動を通して、生徒の環境整備意識を向上できるようにする。 【5S活動の理解・啓発と実践】 <ul style="list-style-type: none"> - 学校所在地のゴミ分別ルール遵守状況を定期的に確認し、課題を把握する。 - 分別ルールを守ることが5S活動の実践の一つであることを校内に周知する。 - 活動を通して把握した課題や成果について、情報共有や改善提案を行う。 【家庭への啓発】 <ul style="list-style-type: none"> - 学校行事や保健だよりを活用して、保健厚生委員会による環境整備の取り組み状況を発信する。 - 家庭へ5S活動の意図するところを呼びかけていく。 【アンケート調査】 <ul style="list-style-type: none"> - 全校生徒対象のアンケート調査を行い、環境整備への意識の変化を把握する。
達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会活動において環境整備に関する啓発活動を月1回以上実施し、全校生徒の環境整備に対する意識向上を促すためにはたらきかけた。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・4月から日々ゴミ分別状況を点検し、CFではその結果を掲示物にまとめ展示したり、質問コーナーを設置したりして、生徒へのフィードバックを行い、分別の知識向上を図った。さらに、保健だよりでゴミ分別の調査報告や豆知識等を定期的に発信し、生徒の分別への意識を育んだ。 ・校内美化週間では、前期は5S活動の定着に向けた取り組み、後期は清掃手順の確認に力を入れた。チェックシートの結果から、全クラスが積極的に取り組んでいることを確認できた。 ・毎月1回以上の校内放送や、保健だより、STの時間などを活用し、環境整備に関する情報を全校生徒と家庭に発信することで、環境意識の向上を図った。 ・全校生徒を対象としたアンケート調査を実施したところ、「環境整備のためにゴミの分別に取り組んでいる」と回答した生徒は全体の79.1%という結果であった。
評 価	A
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・地域におけるゴミの分別方法とその理由について生徒への周知徹底を図るなど、生徒が主体的に参加できるような働きかけや意識向上を促す取組があるとより効果的である。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・保健厚生委員会の活動において、アンケートで寄せられた様々な意見を踏まえ、生徒の視点に立った環境整備に関する課題設定と実現可能な解決策の検討を行う。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)

重点目標	進路支援（進路指導）
重点課題	生徒が主体的にキャリア教育の向上を目指しながら、目標に向かって実践できる進路指導（支援）体制を構築
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育の向上を目指した取組の中で実施している「キャリアパスポート」や「みどり野メソッド」等において、生徒自身の課題や目標が適切でなかったり、生徒自身による目標設定が実態的に難しかったりすることがある。
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自分自身の課題を客観的に把握し、それらを主体的に克服しながら進路実現に向かおうとする意欲を育むことができるような支援体制の充実と改善を行う。
方策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が学期や行事毎に実施する「キャリアパスポート」や「みどり野メソッド」の作成を精査し、効率化を図りながら取り組むことで、自分自身の課題を客観的に的確に把握する機会を定期的に設ける。 ・自分の課題について主体的に克服しようとする意欲を持てるよう、関係する分掌や年次、スクールカウンセラー等と連携しながら学校全体で取り組む。
達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・実施頻度が高まったと共に効率化が図られたが、学校全体で取り組む意識がやや欠けていたため、生徒の主体的な意欲を育むための支援体制の工夫が今後更に必要である。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・「みどり野メソッド」は実施から2年が経過して周知が進んだことで、各年次で定期的に実施され、運用も円滑になった。また、回答結果の集計では、年次の実態や傾向、今後の課題等が数値化された。「キャリアパスポート」では、各行事で異なる目標等を記載した様式を年度当初に配布したことで、学級運営で適宜活用できた。今後の「みどり野メソッド」や「キャリアパスポート」等では、学級での運用に留まらず、「生徒が自分の課題を克服するための工夫を考える」場面で活用し、学校全体で意識しながら支援に取り組めるような工夫が必要である。
評価	B
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・諸事情により進路未定となる生徒にも社会との繋がりを持って卒業させてほしい。 ・達成目標は数値化されている方が客観的に評価を行い易い。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度の「みどり野メソッド」や「キャリアパスポート」では、生徒が記入する際にタブレットを使用することを検討したい。集計結果のデータ化により、各年次や学校全体の傾向等をより多面的に分析し活用していきたい。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。）

重点項目	特別活動
重点課題	豊かな人間関係を構築する能力とコミュニケーション能力の育成
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 本校生の特徴として、生徒会活動や学校行事（スポーツフェスティバルや新川キャンパスフェスティバルなど）において、他の生徒と協働しながら主体的に活動できるような生徒が少ない。教師からの指示に従って活動することはできるが、他の生徒との良好なコミュニケーション能力が乏しく、基本的な生活習慣が確立できていないため欠席が多い生徒が多い。
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> 「様々な特別活動に主体的に参加する、互いのよさを生かしながら協働して活動する、他の生徒や教師とのコミュニケーション能力を高める」という目標を達成するため、ホームルーム活動や生徒会活動、学校行事、部活動を通して、生徒が主体的に特別活動に参加したり、協働して活動に取り組んだり、コミュニケーション能力を高めたりする機会を増やす。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ホームルーム活動では、話し合いや他者と協働しながら活動する経験を通して、ホームルームの一員としての役割を自覚させ、協調性やコミュニケーション能力を身につけさせる。 生徒会活動や委員会活動では、活動に進んで参加する意識を高めさせるとともに、学校生活をよくするための課題を見出し、話し合いを通して合意形成を図る経験を増やせるように取り組ませる。 学校行事では、生徒会や委員会が主体となって「生徒会だより、委員会だより」を発行し、学校行事の活動内容や行事の意義を知らせることで、行事への参加率を高めさせる。また、事後アンケートを行い、自らの活動の振り返りを行わせる。
達成度	<ul style="list-style-type: none"> 事後アンケートの結果から、多くの生徒が他の生徒と協働しながら、意欲的に特別活動に取り組んでいることが分かった。キャンパスフェスティバルでは「桜梅桃李」のスローガンのように各々が役割を果たすことができた。
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> スポーツフェスティバルの事後アンケートでは「大会スローガンを意識して、準備や活動を行うことができたか」の質問に対し「よくできた」、「できた」と答えた生徒が98%であり、意欲的に活動していたことが分かった。 新川キャンパスフェスティバルでは、「桜梅桃李 rainbow（一人一人が役割を果たし文化祭を作り上げよう）」のスローガンの元、7月から年次ごとに企画を練り上げ、夏休み期間中や、昼休みの空き時間や放課後などの時間を捻出して各企画の準備活動を行っていた。前日準備や当日の活動でも、生徒たちは自分の役割を理解しながら主体的に活動していた。事後アンケートでは、87%の生徒が「スローガンを意識しながら活動ができた」と答えている。「去年よりも余裕をもって活動できた」、「計画的に活動できた」、「協力して活動できた」等の意見が多くあった。 ボランティア活動では、昨年度よりも参加生徒数は2倍以上に増えた。
評 価	B
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のスローガン達成率が高いことから評価をAとしてよいと感じた。 卒業後の社会生活を意識した指導が学校の課題であり、指導方法やアンケートの取り方などの工夫が必要である。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 不登校を経験したり、特別な配慮が必要だったりする生徒が多く在籍するため、特別活動に参加した経験も少ない生徒が多くいる。各年次に所属する生徒の実態を踏まえながら、年次ごとに段階的な指導を行い、本校の生徒にとっての特別活動の目標を達成できるような活動を引き続き実践していかなければならない。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった。)